



Title	カトリックの「民間信心」に関する一考察：「小さな」聖人祭のなかに示されるもの
Author(s)	井本, 恭子
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2014, 48, p. 19-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56619
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カトリックの「民間信心」に関する一考察

—「小さな」聖人祭のなかに示されるもの—

井 本 恭 子

キーワード：民間信心／聖人／再利用の実践／協同自助／変化と持続

はじめに

本稿の目的は、イタリアにある島サルデーニャの村の祭を例に、「民間信心」¹⁾が「その土地に、その形でしか現れないもの」だからこそ、「ローカルなものを問うひとつの方法」になり得ることを示すことにある。そこで、まず、イタリアにおけるアナクロニズムのように見える祭のよみがえり現象を背景に、「民間信心」を取りあげる「なぜ」と「いま」を説明する。次に、「その土地に、その形でしか現れないもの」、よみがえっている祭を概観する「その土地」とは具体的には、筆者のフィールドであるサルデーニャ島の村であり、「その形でしか現れないもの」は、「民間信心」と結びつけられる「小さな」聖人祭である。

この「小さな」聖人祭とは、村の外にある教会に移動して行われる「野の祭」のこと、「古い形」の聖人祭を指す。その「古い形」は「古い形態をとどめている」という意味ではなく、「民間信心」の表出行為とされる、まさにその形以外では現れないもののことである。筆者はそこに「ローカルなもの」があると考え、1960年代末に実践されていた「長い祭」を取りあげ、「古い形」の輪郭を描いてみた。「民間信心」の具体的な実践とされる ノヴェーナ novena を伴った「長い祭」を伏線に敷くことで、「野の祭」のよみがえりによって保持されるものが見えるだろう。「長い祭」の具体的な記述について

は、C.Gallini の著作 *Il Consumo del Sacro: Feste lunghe di Sardegna*²⁾ に負うところが大きいことを断っておく。

1 具体の「民間信心」

「民間信心」こそ「ローカルなものを問う方法」だと考えるには、ふたつの理由がある。単なるひらめきではない。それが何であるかを示せば、「民間信心」の「なぜ」と「いま」の疑問に答えることになるだろう。

まずひとつには、土地と結びついた祭や儀礼が、最近「農民の」「キリスト教以前の」「異教の」「伝統的な」といった形容詞をともなっており、とりわけ、歴史的、経済的、地理的に周縁とされたヨーロッパの地域に、よみがえっていることである [Bravo 2005, Bonato 2006a]。この「よみがえり」とは、乱暴に言ってしまうと、「伝統」が継承されているところでは、刷新がなされ、消えてしまったところでは、再構築あるいは新たな創造が行われる状況を指している³⁾。筆者のフィールドであるイタリアにおいても、祭・儀礼の再登場、再生、再創造の現象が広がっており、過去の遺物やアナクロニズムではなく、今日的な課題として、民俗学者、民族学者、人類学者たちの関心を引いている。トリノ大学で開催された「第8回イタリア民族・人類学会」（2003年6月26日～28日）のテーマが、「祭—伝統、刷新、再創造—」であったことは、そうした状況を示す一例である [Bonato 2005, 2006b]。

「民間信心」に着目する背景には、祭・儀礼のよみがえり現象があるというだけでは、まだ十分な説明とは言えない。周縁とされる地域に、どのような形の祭・儀礼がよみがえっているのか、その土地の力の入れようが示されねばならない。本稿で扱うサルデーニャ島を例にすれば、もはや「見物の衆も来ず、誰にも見られているといふ予想もない島」でも、「少なくともより古い形を多く残して居る」[柳田 1994: 354] わけでもないが、山間部の村でよみがえっている祭は「古い形」の祭である。後述するポーノでは、*sas festas de su campu* 「野の祭」と呼ばれており、かつては祈願の場（共同祈願

の儀式)であり、近隣の村からもやってくる家族との社交の場(にぎやかな祭)となっていた。

ポーノのよみがえっている「古い形」が興味深いのは、居住区の外に「聖なる場」(教会を中心とする)が一時的に創出され、そこには必ず聖人が招かれ、その土地の慣習によって整えられてきた「作法」が誇示されるからである。つまり、信心業の場、社交の場、ふだんは埋め込まれて見えない、しかるべき「作法」(「沈黙の言葉」)の共有の場が重なり合うところ、そこに現れる祭の儀式的行為が、何ごとかを示しているのである。「野の祭」には、「素朴な民」の信仰心の自発的な表出行為、その土地の特性や伝統に即した典礼の適応(インカルチャーレーションの問題)など、宗教的側面だけでは抜け落ちてしまうもの、見のがされてしまうものがあるのではないだろうか。

「民間信心」に着目するのは、たとえば、典礼とはそぐわない要素を含んだ聖人祭の再利用という形でしか、その土地に出現もしないし、保持もされないようなものが見えるところだからである。サルデーニャ島の村で、具体の「民間信心」が再び活性化しているいまこそ、「ローカルなものを問う」ひとつの地平が開けると考えるひとつの理由はそこにある。

では、生活の場に具体的なモノや行為となって表れる「民間信心」の地域的側面について、教皇庁はどう見ているのだろうか。少なくとも聖母・聖人の祭である以上、教会が無関心であったり、その重要性や活力を軽視したりするはずがない。事実、2001年12月17日、典礼秘跡省から *Direttorio su pietà popolare e liturgia. Principi e orientamenti* (『民間信心と典礼—原則と指針』、以下『指針』)が公布されたことは、「民間信心」に対して何らかのガイドラインの必要性を感じていることの表れである。第2ヴァティカン公会議で公布された「典礼憲章」(1963年12月4日)⁴⁾において、「典礼は教会生活の頂点であり源泉である」と、すでに典礼の絶対的な優位性は明言されている。にもかかわらず、典礼における「民間信心」の位置づけを改めて明確にし、各地域教会に周知徹底しなければならないのは、「民間信心」の具体的な実践の内容が、その優位性を脅かすほどに、「そぐわない形」となって

いることを物語っているのではないだろうか。『指針』公布は、カトリック信仰のシステムに包摂したはずの「民間信心」が動きだし、根幹である典礼との調和を乱しはじめたことへの危惧の表れである。そこに、いま「民間信心」に着目するふたつめの理由がある。

この『指針』決定をうけて、各地域の教会は土地の人びとの生活に即した教化活動を通して、「民間信心」から「濁り」を取り除き、「浄化」していくことになる。「民間信心」と名づけられ、カトリック信仰に取り込まれた後も、排除されずに残ったものが「濁り」ならば、それこそが典礼との調和を拒むような論理の存在であろう。その論理を問うことは、「ローカルなものを問う」ことにほかならない。ここでは、『指針』の具体的な内容については、深くは立ち入らないが、冒頭に序文として引用されている教皇ヨハネ・パウロ2世の「使徒的書簡 *Vicesimus Quintus Annus* (1988年12月4日)を紹介しておこう。

民間信心は無視もできなければ、冷淡にあるいは蔑んで扱えるものでもありません。それは価値に富んでおり、それ自体が神への宗教的態度を表現するからです。しかし、表出する信仰がますます豊かになり、ほんものになるよう、民間信心は絶えず福音化されねばなりません。典礼の儀式に取って代ったり、混じり合ったりしなければ、キリストの民の信心業も、そのほかの信心形態も等しく、受け入れられ、推奨されます。正統な典礼の司牧ならば、民間信心の豊かさのうえに立ち、信心を浄化し、諸民族の礼拝として聖なる典礼へと導くことができるでしょう (*Direttorio su pietà popolare e liturgia. Principi e orientamenti* : 2)。

2 サルデーニャ島の「長い祭」

一口に「民間信心」と言っても、その具現は一樣ではない。ここでは、*novena* と呼ばれる9日間の連続祈禱を伴った「長い祭」を取りあげてみよう

う。novena は聖母・聖人の祭と結びついており、とりわけ、移牧の村々に顕著であったことは確かだからである [Gallini 2003]。よみがえり現象では、領域内ではあるものの居住区域の「外」にある教会に移動して行われる祭が目立つ。しかし、必ずしも novena とセットではない。たとえば、後述するボーノでは、novena はすっかり教区教会に飼い馴らされた各人の信心業となって「よみがえり」、「野の祭」とは切り離されてしまった。祈りと喜び（にぎやかな祭）は峻別され、前者は教会内の厳粛な儀式に取り込まれたと言えるかもしれない。

ボーノの「野の祭」はもはや村の「長い祭」ではないが、「古い形」が喪われたわけではない。「古い形」とは、祭の形態が変化しても維持されるものの、浄化されない「濁り」だからである。ゆえに、novena という実体そのものが「濁り」なのではなく、移動して行われる祭空間を支える「論理」が重要なのである。とは言え、「論理」は目に見えない以上、具体的な形を頼りにするよりほかに方法はない。そこで、Gallini が 1967 年から 1968 年にかけてヌーオロ地方で行った 5 つの「長い祭」についての詳細な調査をもとにまとめた *Il Consumo del Sacro: Feste lunghe di Sardegna* に依拠して、一時的に形成される「長い祭」の空間を素描してみる。もっとも、ボーノの祭に言及した箇所（novenari の地理的分布図に出てくるのみ）はない。しかし、居住区域の外に移動することに着目すれば、「野の祭」空間の「文法」を知る手がかりにはなるだろう⁵⁾。

まずは当時の村の「長い祭」が行われていた時季と場所についてまとめてみる。「長い祭」は、毎年 5 月から 9 月にかけて、村から数キロ離れたところにある教会⁶⁾ に移動して行われる共同祈願で、聖母や聖人への崇敬と結びつけられた祭であった。その実施場所は、常に「聖地」として「俗なる」空間から完全に排除された場所ではなく、祭の間だけ ^{ノヴェナリーオ} novenario 「聖なる場」に変わっていた。このような一時的な「穴」（外部）となる場所はいまも散在しており、島の風景の特徴となっている。祭が集中する 5 月から 9 月にかけては、ちょうど移牧や農作業の終り、つまり、共同作業を基盤とする労働

が一区切りついたときで、お金も食物も最も集まるときであった。そうした豊かな（富が集中する）ときに、信仰心の有無にかかわらず、食料をたっぷり積み込み、村の人びとは集団（主に家族単位）で小さな教会のある場所 novenario へ移り、cumbessias（あるいは muristenes）⁷⁾ と呼ばれる粗末な建物とともに寝起きし、9日間の祭の時をともに楽しんだのである。

「聖なる場」は教会とその周りにある宿泊施設、そして男たちの社交の場となるテントや祭のクライマックス（聖人の日）に並ぶ露店（かつては家畜市も立った）があった。その空間を統括するのは、祭の組織団の長 priore であり、教区教会の司祭は、教会内の聖なる祈りと厳粛な儀式（聖体拝領など）以外のことに口出しはできなかった。聖の長と俗の長の関係はあくまで相補的で、前者に後者が従属することはなかったのである。

「聖なる場」ではどのようなことが行われていたのか、その9日間の日常を見てみよう。少々乱暴にまとめると、生活の中心は祈り（朝晩）と社交であった。教会での祈りへの参加は強制ではないが、社交は「聖なる場」に滞在する者、訪れる者すべてを巻き込んでいた。毎日、朝と晩に教会に集まって祈りを捧げるのは、もっぱら女たちで、子どもたちは教会前の広場で遊び、男たちは仕事に出て行き、昼食（ときには夕食）まで戻らない。男たちの多くは昼は「家」で食事をし、夜になるとテントに寄り集まって、トランプのような勝負事に興じたり、酒を酌み交したりして過していた。夕刻の祈りが近くなると、親類や知人、近隣の村人もやってくるため、「聖なる場」はにぎやかになる。土地の唄（若者は嫌っていたが）や踊りもあって、教会前の広場はいっそう活気づくのであった。見知らぬ来訪者には、su cumbídu（招待）の義務があるので、cumbessias では必ずお菓子や飲み物が気前よくふるまわれ、ホスト側の家族の社交性が誇示された。もちろん、滞在する家族どうしの交流もさかんで、いつもより豊かな食卓は誰にでも開かれていた。

「聖なる場」のふだんの生活は以上のようなものであるが、祭のクライマックスである聖人の日はいつもと違って、女たちだけでなく多くの村人

が、教会の内外の儀式に参加してた。具体的には、聖人への奉納パン（祭組織団の女たちが用意）の聖別、司祭、旗をもった priore、聖人像を運ぶ組織団の男たち、村の人びとから成る行列、礼拝のあとのパンの再分配までが、一連の儀式となる。厳かな儀式のあとは、にぎやかな宴が設けられ、どんな人でも受け入れてもてなされる。こうしてすべてを消尽して「長い祭」は終り、教会の扉は閉じられ「聖なる場」は再び「野」に戻り、村のいつもの生活が始まるのである。

Gallini は、「聖なる場」で誇示される歓待行為は、すべての人が聖人の「客人」であるからだと述べる。つまり、まず聖人から「客人」への贈与すなわち「恩沢」があり、それに対して奉納物あるいは自分自身が教会にすることで返礼するという関係が、教会外の社交の場では priore や各家族による「客人」への無償の施し＝歓待という行為になる。次のような指摘はさらに興味深い。「聖なる場」で行われる贈与と歓待はつねに開かれた輪であり、誰も拒まず「等しくする」というのは「離されているものを結びつける」こと、そこには互酬性の原理が徹底して貫かれていることである。誰のものでもない「聖なる場」のこうした特徴は、少なくとも「古い形」の輪郭を示しているのではないだろうか。

3 ボーノの「小さな」聖人祭

現在ボーノの領域には5つの「野の教会」*sas cresias de su campu*があり、聖ガヴィノ、聖レステイトウータ、聖バルバラ、聖アンブロージョ、聖ニコラの名がつけられている⁸⁾。そして「野の祭」は、毎年5月（聖ガヴィノ祭と聖レステイトウータ祭）と9月（聖バルバラ祭、聖アンブロージョ祭、聖ニコラ祭）に行われている。しかし、「野の祭を語ることは、幼少の頃の思い出の大海に潜るようなもの」[Amministratore comunale di Bono 2003: 46]と言われるように、かつてのような「長い祭」ではもはやない。逗留して9日間（あるいは13日間）の連続祈禱をするという信心業が消え、ほかの聖

人祭と同じように前日の晩祷と当日のミサの2日間となった。とはいえ、特定の場所を定期的に訪れ、聖人の名のもとに祭を行うことも「民間信心」の表出行為のひとつである。

さて、ここで重要なのは、ポーノでほかの聖人祭の活性化に刺激されたかのように、「古い形」の聖人祭が再利用されたこと、そのこと自体である。現段階では、Galliniのような精緻な観察と記述にははるかに及ばないが、筆者のフィールドノート（2001年、2004年、2005年）と文献をもとに、「野の祭」空間で行われていることをまとめてみよう。

「野の祭」は「^{バエーゼ}村」でもなく「教会」でもなく、「家族」の祭である。1950年代ごろまでは、参加する祭とその費用の負担についての家訓が、限られた集団のなかで受け継がれていたようである [Amministrazione comunale di Bono 2003]。いまは、ひとつの家が費用をすべて負担するのではなく、ほかの聖人祭と同じように毎年祭の実行員会が組織され、その長 presidente が「野の教会」と宿舎 cumbessias⁹⁾の鍵を持ち、いっさいを取り仕切るのだが、中心となる単位は家族であることに変りはない。

特定の家族が参加する「野の祭」は、親密であるがゆえに閉鎖的に見えるが、「聖なる場」はどうなのだろうか。「野の祭」空間を見てみよう。「野の教会」のある場所は、9日間の連続祈禱の場ではないので novenario ではなく、^{サントゥアリオ}santuario「聖なる場」と呼ばれ、祭のないときはただの「野」の一画にすぎない（図1）。これは聖俗の境界があいまい、はっきりしないというのでも、ひとつに溶け合っているというのでもない。「聖なる場」は「野の教会」を中心に一時的に創出されるとしても、「教会」自体はいついかなるときも「聖」だからである。「野の祭」によって創りだされるのは、聖と俗が連続したまま区別されている空間ではないだろうか。「野の祭」空間を見ると、教会の儀式が行われる場（聖）と社交の場（俗）が、それぞれの場の個別性を確保しつつも融合している（図2）。このような儀式と社交の連続性は、聖人像を共食テントに「客」として迎える行為、すなわち歓待によって示されるのである。

こうした状態は、閉鎖性と開放性ということにも通じる。それは、特定の家族の祭ではあるが、ミサに来る者や招待していない来訪者も受け入れ、共食テントで奉納パンを分配したり、飲み物をふるまったりする歓待行為に表れている。一方、祭は誰にでも開かれているからといって、特定の家族の独立性が消えるわけではない。各家族にはそれぞれ歓待の輪があり、その輪は招かれた者にしか開かれていない、つまり、閉じられているのである。ここにも聖人を介した歓待が、連続性のなかの個別性を可能にしている。

「野の祭」には、このように「連続したまま区別されている」状態が一貫して見られる。それが「民間信心」の「濁り」であり、聖人を介した歓待とあって表れているとすれば、そこにこそ、「ローカルなもの」の論理が示されているのではないだろうか。それをことさら強調しなければならない（よみがえらせる）状況は、「ローカルなもの」の危機を告げているのかもしれない。

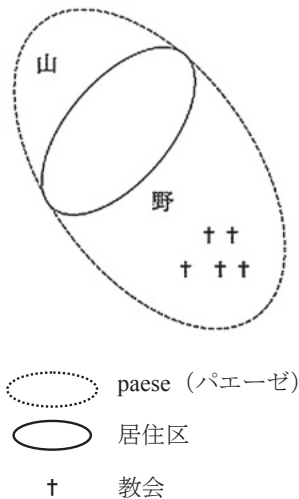


図1 ボーノの領域

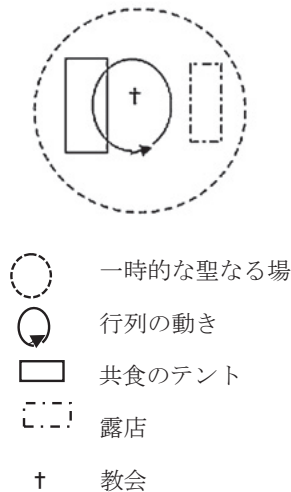


図2 「野の祭」空間

おわりに

なぜ、いま、カトリックの「民間信心」に目を向けるのか。ひとことで言えば、それが「ローカルなもの」を問うひとつの方法だと考えたからである。「ローカルなものを問う」とは、その土地が他とは違うことを強調するために、起源や特異性を見いだしたり、一定のまとまりをもった空間（たとえば「郷土」）をつくるために、「純粹」「素朴」「自然」「古風」に見せかけることを問題にしたりするという意味ではない。その土地に、その形でしか現れないものを見極め、その意味を考えてみることである。「民間信心」は、そのための具体的な手立てとなるのではないかと考えている。

キリスト教的要素の受容のしかたは土地によって異なっており、それをいま「ローカルなもの」として、改めて問題にしなければいけないのか、という意見もあるだろう。事実、「民間信心」はさまざまな象徴や形式で表現され、その特殊な形態が時間と空間の地域性を語っている。しかし、ここで言う「ローカルなものを問う」とは、「民衆」を主体にして、その土地に発した信仰実践を再発見し、その宗教性（世界観）を再解釈することではない。また、ある土地の「民間信心」をその形態、意味、機能の変化から捉えることでもない。

筆者の関心は、「民間信心」とされる実践の形がまるで変化に適応するかのように再利用され、キリスト教以前の土着信仰や慣習の残骸、名残に還元されない「何か」（保持されるべきもの）を示すような場の一時的な創出にある。その「何か」は実在というよりも、その「場」が創りだす感覚かもしれないと考えるからである。それを「素朴な民の信心」と名づけ、異質な断片と捉えることに違和感を覚えてしまう。

本稿で取りあげた「長い祭」や「野の祭」はその一例であるが、「民間信心」全体が「濁り」のような印象をあたえたかもしれない。「ローカルなものを問う」方法となり得る「真正な濁り」を示すためには、「民間信心」と

名づける側の教区教会の動きや聖人崇敬の諸相を無視するわけにはいかない。それは「野の祭」の徹底した観察と記述を含めて、次の課題としたい。

[注]

- 1) *Direttorio su pietà popolare e liturgia. Principi e orientamenti* (『民間信心と典礼—原則と指針』)では、「民間信心」はキリスト教信仰において、聖なる典礼ではなく、民あるいは民族やその文化の精神に由来する特殊な形で表現されるもの(私的あるいは共同の)を規定するものとされる。つまり、文化的表出の複合体、文化と調和しその特性が表現されたものと捉えている。
- 2) Gallini が調査した5つの novenario は、聖フランチェスコ(ルーラ)、聖コジモと聖ダミアーノ(マモイアーダ)、救いの聖母(オロゼイ)、お告げの聖母(ビッティ)、ゴナーレの聖母(オラーニとサルーレ)である。これらの「長い祭」は現在ますます盛んで、オロゼイの救いの聖母祭は18日間にも及んでいる。
- 3) Boissevain は、1970年代、工業化・都市化とともに衰退すると言われた多くの祭が、まるで生成と消滅のバイオリズムをもつかのように、新しい社会状況のなかで復活していたり、新たに創造されたりする現象を *revitalization* と名づけて概念化した。
- 4) 第2ヴァティカン公会議は「典礼憲章」(1963年)を公布し、典礼刷新に取り組んだ。典礼と民間信心の問題は、13条で取りあげられているが、典礼と調和していること、典礼に由来すること、信徒を本質的に優れた典礼に導くようなものであることといった信心業の原則が示されるだけであった[Doc.Concilio Vaticano II (1962-1965)]。
- 5) 聖ライモンドと聖レスティトゥータの「聖なる場」が挙げられているが、Gallini の調査時にはすでに廃れていた[Gallini 2003: 57]。前者の教会は「野の教会」とは反対方向の山側にある丘の上に建っており、現在は「^{パエーゼ}村」の祭として年々スペクタクル化している。一方、後者は「野の祭」としてよみがえっている。
- 6) 「教会」という言葉を使っているが、建物は小さくて粗末なお堂のような建物で、なかには聖人像が安置されている。「礼拝堂」としないのは、土地の言葉では「教会」と表現しているからである。
- 7) 長屋のように各部屋が連なり、その開口部は教会前の小さな広場に向って開かれ、独立性(閉鎖性)と連帯性(開放性)の両方を備えている。そこでは「客人」に食事がふるまわれたり、女たちが協同して祭の料理を準備したりする。各部屋は村の家族に割り当てられるが、ゲスト(隣接する村から参加する家族)用に部屋

もいくつか確保されている。その部屋割りは、その年の「祭を司る長」priereに一任されていた。

- 8) 5つとも居住地区から数キロの「野」にかたまっている。そこはかつて Lorthia という集落があったところで、疫病あるいは外敵によって滅んでしまい、5つの教会だけが残ったと言われている。
- 9) 車で村と教会を往復するようになったため、宿舎は聖人祭の前日の晩と当日にふるまわれる食べ物や飲み物の置場や調理場として使われる。

[参考文献]

- 古野清人 (1967) 「南イタリアの毒グモ踊り」『原始文化ノート』、pp.141-162、紀伊國屋新書。
- ターナー、ヴィクター (1976) 『儀礼の過程』、富倉光雄訳、新思泉社。
- 柳田國男 (1994) 「日本の祭」『柳田國男全集 13』、pp.211-430、ちくま文庫。
- レヴィ＝ストロース、クロード (1993) 『構造人類学』、荒川幾男ほか訳、みすず書房。
- (2001) 『親族の基本構造』、福井和美訳、青弓社。
- Angius, Vittorio (2006) *Città e villaggi della Sardegna dell'Ottocento: Abbasanta-Guspini*, L.Carta (ed.), Ilisso Edizioni.
- Amministrazione comunale di Bono (2003) *Le feste popolari a Bono: Fra tradizione e modernità*, Magnum-Edizioni.
- Boissevain, Jeremy (ed.) (1992) *Revitalizing European Rituals*, Routledge.
- Bonato, Laura (ed.) (2005) *Festa viva: Continuità, mutamento, innovazione*, Omega
- (2006a) *Tutti in festa: Antropologia della cerimonialità*, FrancoAngeli.
- (2006b) *Festa viva: Tradizione, territorio, turismo*, Omega.
- Bravo, Gian Luigi (1988) Sacro e profano/Piemonte, F. Alessandro (ed.), *La festa*, Electa, pp.38-47.
- (2003) La comunità: norme, credenze, riti, *Italiani: Racconto etnografico*, pp.149-186, Meltemi.
- (2005) *La complessità della tradizione: Festa, museo, e ricerca antropologica*, FrancoAngeli.
- Cirese, Alberto Mario (2010) E.B.Tylor: cultura, adhesion, sopravvivenze, variazioni concomitanti, *Altri sé: Per una antropologia delle invarianze*, pp.169-183, Sellerio Editore
- De Martino, Ernesto (1961) *La terra del rimorso: contributo ad una storia religiosa del Sud*, Il Saggiatore.
- Galasso, Giuseppe (1997) Santi e santità, *L'altra Europa: Per un'antropologia storica del*

- Mezzogiorno d'Italia*, pp.79-144, Argo.
- La festa, *ibid.*, pp.145-170.
- Gallini, Clara (2003[1971]) *Il Consumo del Sacro: Feste lunghe di Sardegna*, Ilisso [La Terza].
- Geertz, Clifford (1957) Ritual and Social Change, *American Anthropologist* 59: 32-54.
- Lanternari, Vittorio (1977) *Crisi e ricerca di identità: Folklore e dinamica culturale*, Liguori Editore.
- Mazzacane, Lello e Satriani, Luigi M.Lombardi (1974) *Perché le feste: Un'interpretazione culturale e politica del folklore meridionale*, Giulio Savelli Editore.
- Pira, Michelangelo (1984) La festa grande, *Sardegna tra due lingue*, pp.85-93, Edizioni della Torre.
- Sodi, Malio (ed.) (2013) *Liturgia e pietà popolare*, Libreria Editrice Vaticana.
- Pirisinu, Salvatore (1999) *1000 e più feste. Guida aggiornata alle feste e alle sagre della Sardegna*, Superstar-EDES.
- Tak, Herman (2000) *South Italian Festivals: A Local History of Ritual and Change*, Amsterdam University Press.
- Valentin, Emanuel (2009) Ritual as Cultural Reserve among Sicilian Migrants in Germany, *Durham Anthropology Journal* 16(2) : 23-43.
- Viscardi, Giuseppe Maria (2005) *Tra Europa e "Indie di Quaggiù": Chiesa, religiosità e cultura popolare nel Mezzogiorno (secoli XV-XIX)*, Edizioni di Storia e Letteratura.
- Viscardi, Giuseppe Maria e Lerou, Paule (ed.)(1996) *La pietà popolare in Italia: Tomo 1 Calabria*, Letouzey & Anè e Edizioni di Storia e Letteratura.
- Direttorio su pietà popolare e liturgia. Principi e orientamenti* (2002), Libreria Editrice Vaticana.
- Doc.ConcilioVaticano II (1962-1965), *Enchiridion Vaticanum vol.1*, Concilio Vaticano II, 4 dicembre 1963.

(文学研究科准教授)

SUMMARY

A Study on Catholic Popular Piety
—Phenomena Demonstrated at a ‘Small’ Saints Festival—

Yasuko IMOTO

This paper proposes to demonstrate that Catholic Popular Devotion is one method of exploring the concept of ‘local’ devotion. Obviously, peoples’ religiosity takes various forms, and some believe there is no need to raise this issue again. However, ‘local’ here does not refer to peculiarities, being ‘different from others’, but to phenomena ‘only visible in that place and in that form’. As social change occurred (for example, modernisation or globalization), a remarkable revitalization also occurred in local festivals celebrating saints deeply linked to popular piety while signifying something ‘local’. This paper argues such a perspective with an example of the small Sardinian festival of saints.